

---

# 緋弾のエリア ~ 殺戮の転生者 ~

麒麟

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

緋弾のアリア〜殺戮の転生者〜

### 【Nコード】

N7176Z

### 【作者名】

麒麟

### 【あらすじ】

箱庭学園3年13組『ラストカーベット枯れた樹海』こと宗像形。

異常な殺人衝動を持つ彼がなんと『緋弾のアリア』の世界に転生した！！

神から貰った人を殺さない為の能力と殺すための技術。

それらを駆使し、

彼は自身の異常を制御出来るようになる。

そして彼は神崎・H・アリアに目を付けられたり、

遠山キンジの部屋に居候したり、死闘を繰り広げたり、  
そんな毎日を過ごすのであった・・・  
これは緋弾のアリアとめだかボックス（宗像のみ）の二次創作小説  
です

## 序章 転生した殺人者

目が覚めるとそこには真つ白な世界が広がっていた。

「目が覚めたか？」

振り返るとそこには帽子を深く被り、腕組している天使？みたいな奴がいた。

どうして天使かと思ったのか、それはこいつに大きな翼が生えているからだ。

「なぜかわからないような顔だな。説明してやろう。」

簡単な話、お前のいた世界は消えてお前は死んだ」

「死んだ？ならなぜ僕だけがここにいる」

「俺がお前を呼んだからだ」

「人吉君達は死んだのか？」

「ああ、死んだね」自称神は答えた。

「まあ、よく分かった。で？僕はどうすればいい」

「とりあえず転生してもらおう。何処がいい？選べ」

すると僕の前に書類らしきものが現れた。

1つとつてみると「緋弾のエリア」とかかれた紙が入っていた。

「面倒だからこれでいい」

「おいおい、自分の生きる世界だぜ？そんな適当でいいのか？」

「僕は人を殺さなければそれでいい」

「やれやれ・・・それじゃ俺からプレゼントをやるぞ。こっちにいい」

「そいじゃ、ちょっと動くなよ・・・」  
自称神は僕の額に指をあてた

「何をした？」

「お前が人を殺せないようにした」

「本当か？」

「本当だ」

「・・・。まあいい」

「その世界に行くなら武器が必要・・・ってお前には必要ないか。まあ受け取れ」

「これは・・・ベレッタ90-Twoか？」

「よく知ってるな。俺からお前への2つ目のプレゼント。  
ついでに、クラスは2年A組。一般校からの転校生って事にしておいた。」

学力は前の世界を引き継ぐからそのまま。それじゃ、行って来い」

「あまり気乗りしないが・・・仕方ない」  
その瞬間、世界は真つ暗に変化し意識が飛んだ。

「宗像形・・・さらばだ」

## 第1幕 殺戮者の始動

「ここはどこだ？」

辺りを見渡すと住宅地が広がっていた。

そして、一際異彩を放つ学校が見えた。

(あれが学校か?)

とりあえず、そこに向かって歩いていった。

「そういえば、あの神僕に殺さない能力与えるとか言ってたけど本当か？」

半信半疑で考えていると

(あれは・・・)

イスラエルIMI社の短機関銃UZIだ。  
セグウェイに搭載されている。

(なぜこんな住宅地に・・・)

そんな事を考えているとUZIは僕の頭に標準を向けた(様に見えた)

「頭を狙ってるな、仕方ない破壊しよう。転生して1発目は・・・  
RPG7《これ》だ」

ドオオオオオオン!!!!!!

轟音を立て、セグウェイは吹き飛んだ。

「派手すぎたか？」

幸い、周りに人はいなかった。

すると後ろから爆発音が聞こえ、パラグライダーが体育館に突っ込んだ。

「気になるし、見に行こう」

体育館の中に入ると何も無い」

(?おかしいな)

するとさっきのUZIがまた来た。

すると跳び箱の中からUZIへ銃口を向ける少女がいた。

僕に気づいたのか彼女は

「さっきの爆発はあんたね？手伝いなさい!!」

「僕は傍観させてもらうよ。だから手伝わない」  
様は面倒だからだ。

「その制服・・・武偵高のでしょ？」

「今日から転入してきたんだ」



「だったらあんたも手伝いなさい!!」

あれ? さっき手伝わなかったのに・・・

突然、今まで何もしてなかった男の・・・  
心配が変わった。

例えるならば猫が虎にでもなったような・・・

男は少女を抱きかかえると、  
跳躍し、銃弾の届かない非殺傷距離まで飛んだ。

そのままUZIの方へ向かって行き、全てのUZIを破壊した。

僕はその様子を無言で見ていた。

そして、彼はそのまま歩いて行こうとした。

僕は彼の頸動脈を狙った。

かつての世界でめだかさんにしたように。

予想通り、彼は避けた。

一番驚いていたのは彼女だ。

「なっ!?! 何してんのよ!! あんた今・・・完全に殺す気だったじゃない!!」

「君、なかなかやるね」

「これぐらいなら強襲科アサルトで何度もあったからな」

「アサルト  
強襲科？」

聞きなれない言葉だ。

恐らくは学校の事だろうが・・・

「君とほいい友達になれそうだ」

「奇遇だな。俺もだよ」

こうして僕は2人と出会った。

## 第2幕 仏頂面の転校生（前書き）

実際、宗像さんは3年ですが2年で捻じ込みました^^;

ちなみに元の学校は帝学院という所にしました（適当に考えた学院です）

## 第2幕 仏頂面の転校生

転校早々遅刻した。

まあ別にどうでもいいし。

(確か2年A組だったか?)

僕がかつていた「十三組の十三人」・・・すなわち十三組は登校義務がなかった為、普通に学校に通うのは随分久々だ。

さらに転校生という事もあり、廊下で待たされた。

ついでに言うと、今朝のツインテールと一緒に。

「...。」

「.....。」

しばらく無言が続き、

「ねえ、アンタ・・・」

話を切り出したのは彼女だ。

「今朝のアイツ、本気で殺すつもりだったの?」

「それがどうかした?」

「どうもこうもないわよ！！」武偵は人を殺してはいけない』武偵法9条にもあるでしょ？」

「僕は彼が避けると分かかってて殺そうとしたんだ。なにか問題がある？」

そう言った所で先生が僕達の事を呼んだ。

話は途中で終わり、僕に続いて彼女も教室に入った。

先に彼女　今分かったがアリアというらしい　が自己紹介をし、彼にベルトを返却した。

それで騒がしくなり、彼女が銃を発砲してから自己紹介をした。

「始めまして。帝学院から転校してきた宗像形です。学科は強襲科に入ろうと思ってる。  
よろしく」

色々な言葉が聞こえてきたがとりあえず無視しよう。

「宗像君は神崎さんみたいな希望はある？」

「特にありません」

「それじゃあ・・・峰さんの隣が空いてるからそこに座ってね」と先生に指示された。

「峰さん・・・だっけ？よろしく」

「理子でいいよ　え」と・・・宗像君だから・・・ムー君だよ

ろしく！」  
変なあだ名をつけられた。

休憩時間には転校時恒例の質問攻めだった。

「部活どこ入るの？」 「帰宅部だ」

「武器は何使ってるの？」 「小型拳銃各種に大型オートマチック拳銃多数、狙撃銃、ミサイル、手榴弾に槍や狼牙棒とか使ってる」

みんなが揃ってもしかして千剣千銃<sup>セントラ</sup>?とか言っている。

間違いではない。今のも手持ち武器の1/3も言っていないから。

それから学校が終わり、先生に男子寮の場所と部屋を言われ、そこに向かった。

住人が居るようだから一応、チャイムを鳴らした。

「はいはいどちらさま……って転校生の……確か宗像だったか？  
話は聞いている。まあ入れよ」

「そうさせてもらおうよ」  
そして部屋に入った

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7176z/>

---

緋弾のエリア～殺戮の転生者～

2011年12月24日07時48分発行